

3月25日正午必着

明石春浦先生書



鶯<sup>おう</sup>花<sup>かの</sup>世界<sup>せかい</sup>如<sup>いは</sup>春<sup>はる</sup>夢<sup>む</sup>、烟<sup>えん</sup>雨<sup>う</sup>樓<sup>ろう</sup>臺<sup>たい</sup>似<sup>はが</sup>畫<sup>ず</sup>圖<sup>にたり</sup>（張翥）

鶯<sup>えん</sup>なき花<sup>な</sup>咲<sup>き</sup>今<sup>い</sup>やこの世<sup>よ</sup>は春<sup>はる</sup>夢<sup>む</sup>の如<sup>ごと</sup>くのかである。又、烟雨<sup>えんう</sup>にけむる樓<sup>ろう</sup>臺<sup>たい</sup>は繪<sup>え</sup>のようである。

明石幸子書



ロダン作

芸術家にとって一切が美である（ロダン）

世路羊腸千里曲  
功名蝸角幾人間

雨宮春聲先生書

世路羊腸千里曲、功名蝸角幾人間（王越）

人生行路は羊腸の如くつずら折りでい。功名を求めて蝸牛角上の争をどの人々が苦しんだことであろうか。

条幅部創作課題

四種の詩文から一種を選択して出品のこと。

野鶯啼破春（曹松）

野鶯啼いて春を破る

うぐいすが春のおとずれを告げてなく。

春潮帶雨晚來急  
野渡無人舟自橫

（韋應物）

春潮雨を帯びて晚來急に  
野渡人無く舟自ら横たわる。

春の潮は雨を帯びて日暮頃から急に満ち、  
渡し場に人影もなく舟が横たわっている。

喜鮑禪師自龍山至上（劉長卿）

鮑禪師の龍山自り至るを喜ぶ 劉長卿

故居何日下 春草欲芊芊

故居 何れの日にか下りし 春草 芊芊たらんと欲す

猶對山中月 誰聽石上泉

猶お山中の月に対し 誰か石上の泉を聴かん

猿聲知後夜 花發見流年

猿聲 後夜を知り 花発いて 流年を見る

杖錫閑來往 無心到處禪

錫を杖いて 閑に來往す 無心 到處の処禪なり

何事もうつりのみゆく世の中に花は昔の春にかはらず（良寛）

半紙部規定課題A

3月25日正午必着

風 来  
波 往  
人 任

※作品には必ず落款を入れてください。

明石春浦先生書

※課題A(楷書)と課題B(四体の中より一書体選択)の二点を出品のこと。

半紙部規定課題B

3月25日正午必着

行書

來往任  
風波

隸書

來往任  
風波

明石春浦先生書

草書

來往任  
風波

行草書

來往任  
風波

呉の地を遊歴し 更に越の地方に行き ただ風まかせ 波まかせに往来する  
 またも貴方をお送りするのだが 春の草の茂るのをどうすればよいのでしょうか  
 山の頂は明るく まだ雪が残り 潮は満ちて いっぱいに夕陽の日ざし  
 いまものこる季子の祠廟 舟をとめて ちょっと立ち寄られるよう

送「韓司直」 皇甫冉

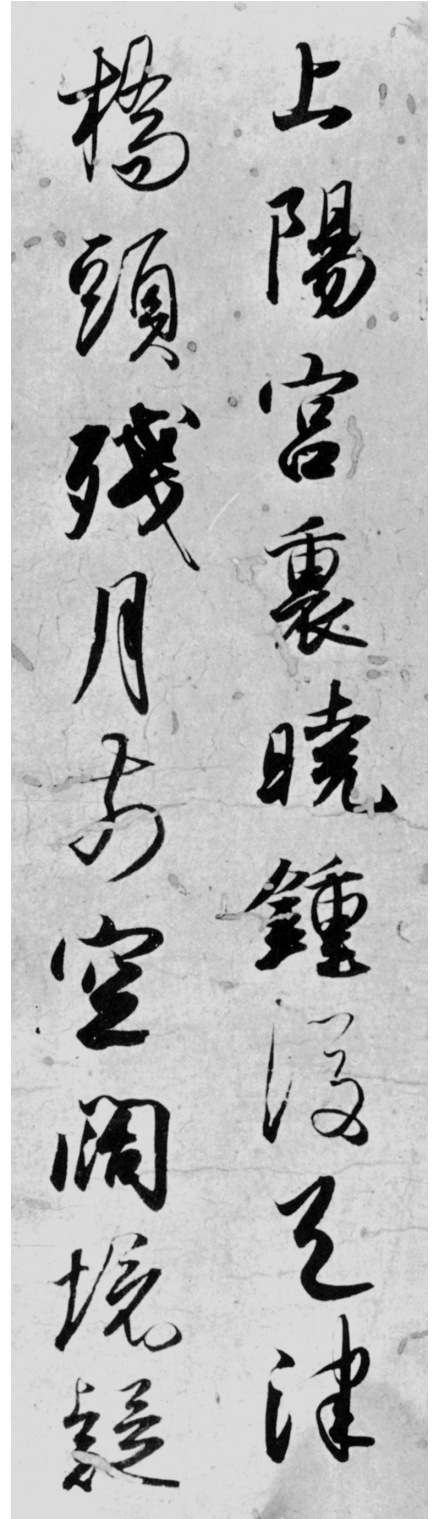
游<sub>レ</sub>呉 還<sub>レ</sub>適<sub>レ</sub>越  
 來<sub>レ</sub>往<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>風波<sub>一</sub>  
 復<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>王孫<sub>一</sub>去  
 其<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>芳草<sub>一</sub>何  
 山<sub>レ</sub>明 殘<sub>レ</sub>雪 在  
 潮<sub>レ</sub>滿 夕<sub>レ</sub>陽 多  
 季<sub>レ</sub>子 留<sub>二</sub>遺廟<sub>一</sub>  
 停<sub>レ</sub>舟 試<sub>レ</sub>一過

韓司直を送る 皇甫冉

呉<sub>一</sub>に遊<sub>レ</sub>び 還<sub>レ</sub>た越<sub>一</sub>に適<sub>レ</sub>き  
 來<sub>レ</sub>往<sub>二</sub>風波<sub>一</sub>に任<sub>ス</sub>  
 復<sub>レ</sub>た王孫<sub>一</sub>を送<sub>リ</sub>去<sub>ル</sub>  
 其<sub>レ</sub>れ芳<sub>二</sub>草<sub>一</sub>を如<sub>レ</sub>何<sub>せん</sub>  
 山<sub>レ</sub>明<sub>ら</sub>かにして 殘<sub>レ</sub>雪<sub>一</sub>在<sub>リ</sub>  
 潮<sub>レ</sub>滿<sub>ち</sub>て 夕<sub>レ</sub>陽<sub>一</sub>多<sub>し</sub>  
 季<sub>レ</sub>子<sub>一</sub> 遺<sub>二</sub>廟<sub>一</sub>を留<sub>ム</sub>  
 舟<sub>一</sub>を停<sub>メ</sub>て 試<sub>ミ</sub>に<sub>一</sub>た<sub>レ</sub>び過<sub>ラン</sub>こと<sub>を</sub>

(出典)  
 朝日新聞社刊  
 「三体詩」下より

3月25日正午必着



上陽宮裏曉鐘(鐘)後 天津橋頭殘月前 空闊境疑(非下界)  
上陽宮裏、曉鐘の後、天津橋頭、殘月の前。空闊くして境は(下界にあらざるかと)疑われ、

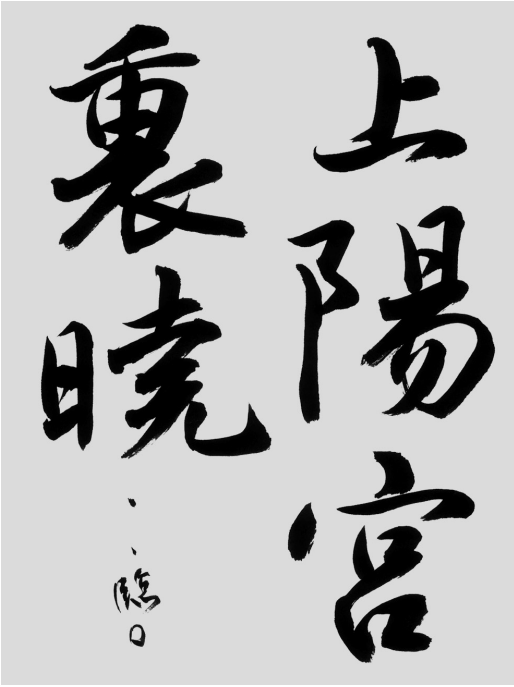
雨宮春聲先生臨書

平安 藤原行成・白樂天詩卷

平安時代は、貴族の文化であり、従来の唐風文化から離れて国風文化へと移行していった時代でもあった。書の世界でも「三筆」の時代から「三蹟」(小野道風、藤原佐理、藤原行成)の時代へと唐風の書が優美典雅な和様書道へと変化していった。藤原行成の父は一条摂政原伊尹の子義孝、母は醍醐源氏・中納言源保光女、生まれてすぐ伊尹の養子となるが、伊尹がその年に没し、父の義孝も行成三歳の時に没、以後は母と外祖父保光に育てられる。若い頃はかなり不遇で、出家も考えるほどだった。源俊賢が藏人頭の後任に推挙してくれたことにより運が開け、出世するようになる。

書においては、優れた「手書き」で、世尊寺流の開祖として特別に尊重され、行成の書跡は「権跡」と呼ばれるようになる。この白樂天詩卷は、中国・唐時代中期の詩人、白居易(白樂天 七七二〜八四六)の詩文集『白氏文集』から四篇の詩を揮毫したもので、百八十二行より成る。紙枚は十一紙、毎行十三、四字を前後する程度で、文字の大小も甚だしい変化を示していない。しかし、その一字一時のすがたはさすがに優雅端麗をつくり、平安時代の典型的な筆蹟となすべきものである。(春龍)

上陽宮裏曉





青山緑水元依舊、明月清風共一家  
(五灯会元)

悟ってみれば昔どおり変りない。

△做書参考▽

※この釈文での臨書部門の出品は出来ません。



上陽宮裏曉鍾鍾後 天津橋頭殘月前



ち  
知

しき  
識

中学一年

雨宮春聲先生書



おん  
恩

し  
師

中学二三年

菅井松雲先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



せい と  
生 徒

小学五年

榎戸春龍先生書



しん ゆう  
親 友

小学六年

藤井良泰先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



3月25日正午必着



ぶん

がく

小学三年

藤田幸春先生書



じ

だい

小学四年

細谷春誠先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



明石幸子書

す み 小学一年・幼年



森戸春濤書

小 川 小学二年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

3月25日正午必着

教育部硬筆

ペン字部

力強く歩いていこう	どんなに険しい道も
-----------	-----------

小学五年

寄せ書きをします	一枚の紙にみんなで
----------	-----------

小学六年

たんすの中へ収納する	冬物の衣類を洗濯して
------------	------------

中学

はお見送りをします	あなたが出発する際に
-----------	------------

一般(級位)

あしひきの山のはいづる月かげに 大海原の波を見るかな (明治天皇)

あしひきの山のはいづる月	かげに 大海原の波を見るかな
--------------	----------------

一般(段位)

明石幸子書

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

か	ぼ <sup>ご</sup>
り	ん
を	ぼ <sup>ご</sup>
つ	り
け	に
た	
	あ

幼年

な	と
	て
と	も
け	
い	正
で	か
す	く

小学一年

本	つ
だ	く
な	え
が	の
あ	右
る	に
	は

小学二年

と	流
て	れ
も	の
き	速
け	い
ん	川
だ	は

小学三年

ま	日
ど	当
ぶ	り
に	の
さ	よ
い	い
た	南
花	の

小学四年

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。  
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

あ  
の  
庭  
を  
は  
な  
ら  
し  
の  
庭  
の  
ゆ  
き  
な  
ら  
で  
ふ  
り  
ゆ  
く  
も  
の  
は  
わ  
が  
み  
な  
り  
け  
り

あ  
の  
庭  
を  
は  
な  
ら  
し  
の  
庭  
の  
ゆ  
き  
な  
ら  
で  
ふ  
り  
ゆ  
く  
も  
の  
は  
わ  
が  
み  
な  
り  
け  
り

あ  
の  
庭  
を  
は  
な  
ら  
し  
の  
庭  
の  
ゆ  
き  
な  
ら  
で  
ふ  
り  
ゆ  
く  
も  
の  
は  
わ  
が  
み  
な  
り  
け  
り

あ  
の  
庭  
を  
は  
な  
ら  
し  
の  
庭  
の  
ゆ  
き  
な  
ら  
で  
ふ  
り  
ゆ  
く  
も  
の  
は  
わ  
が  
み  
な  
り  
け  
り



花さそふ<sup>う</sup> あらしの庭の<sup>農</sup> ゆきならで<sup>支那</sup> 天<sup>天</sup> 布利<sup>布利</sup> 毛<sup>毛</sup> 者<sup>者</sup> は<sup>王</sup> わがみなりけり<sup>可身</sup> 利道<sup>利道</sup>

(入道前太政大臣)<sup>にゅうどうぜんたいていじん</sup>

岩本景楓先生書